氏　　名　**坂　なつこ**

学 位 の 種 類　博士（社会学）

学位授与年月日　1999年３月31日

学位論文の題名　**ノベルト・エリアスの初期理論研究**

ー特に歴史哲学から『諸個人の社会』への変遷における社会学的主題の形成に関してー

【論文内容の要旨】

本論文（学位請求論文）は，著者が大学院在学中に継続的に研究した成果をまとめたものであり，この間学会誌等に公表した３本の論文をもとに，新たに書き下ろした論稿を加えまとまりのある論文として仕上げたものである。

本論文の課題は，ノルベルト・エリアスの研究歴において，亡命以前の時期を，通説に習い初期エリアスとして捉え，この期にエリアスが生涯を貫く基本的なモチーフをどのように形成し得たのかを浮き彫りにすることに置かれている。

著者がこのような設問をおこなう前提としているのは，従来のエリアスの研究に関して相反する多様な評価が存在している点にある。著者は，そのことをエリアスの研究の学際的且つ多面的性格，またヨーロッパの精神文化の伝統と結びついた学問的背景，及びエリアスの思想が自身の複雑な経験から生じている点に起因しているとする。また，H. ハーファーカンプ（Haferkamp）の指摘にみられるように，エリアスの初期と後期の研究には強調点の移行，あるいは認識論的切断というべき側面を想定することもでき，このこともエリアスの多面的評価を生んでいるとする。このため，エリアスの思想的な一貫性を自明のものとせず，初期と後期の継続性についても，検討の俎上にのせることがことが必要となっているとする。このことを考えるならば，エリアスの著作を読み解く際には，個々の研究における個別のテーゼを検討するだけでは不十分であり，エリアスに通底する主題を捉えることが必要である。そのためには当時の研究状況も含め，エリアスの理論的，経験的背景を読みとることが必要であると主張する

このことから著者が分析の対象とするのは初期エリアスの研究である。この根拠として，P. R. グライヒマン（Gleichmann），P. U. メルツーベンツ（Merz-Benz），J. ハッケシュミット（Hackeschmidt）の指摘をあげ，初期においてこそ生涯を通底するエリアスの思想的モチーフが形成されたとする。このため初期の学問的な基盤の形成過程を浮き彫りにすることが必要であるとするのである。初期において著者が重視しているのは第一に，1922年－24年に執筆された哲学博士論文（『理念と個人』）における新カント主義との思想的相克とその結果生じた哲学から社会学への移行の表明。第二に，この時期の学問的，及び個人的経験において重要であったと考えられる，ドイツ哲学の人間的転回，及びシオニズム青年運動への関与，及びこれらの結果として,『諸個人の社会』,『文明化の過程』の中に結実して表れる「ホモ・ノン・クラウスス（「開かれた個人）」としての人間像の定立である。

著者はまず起点として，歴史研究への批判哲学の貢献を試みたエリアスの哲学博士論文を検討する。このなかでエリアスは新カント主義に代表される歴史哲学が，歴史研究への自然科学的な方法の直接的適用を批判したのにとどまったのに対し，エリアスはさらにカントのカテゴリー概念にまで疑義を呈し，近代の認識論的主体への批判につながる視点を獲得したとする。すなわちエリアスにとって，近代的自我，主体性への確信は持ち得ないものであり，自律した，個人で完結した人間を思惟の中心点として想定することを容認しなかった，とする。このことからエリアスの関係的な社会学的人間像の形成の模索が開始さ

れ，自身の研究領域を哲学から社会学へ転換させていったとする。この背景として影響を与えたと想定されるものが，1920年代のドイツ哲学における人間学的転回の思潮であり，このもとで非歴史的，非社会的な哲学的人間像から離れ，歴史的，関係的な社会学的人間像の形成を目指す方向をとったとする。また，同時期のエリアスのシオニズム青年運動への指導者としての関与には，ユダヤ民族の離散ユダヤ人（ディアスポラ）のコスモポリタニズムとなどとの親和性から，エリアスの歴史観や世界像に影響を与えたことが推察されるとする。このような思想的諸契機は，エリアスの主張する「現実妥当な人間像」の形成の試みへと行き着く。しかし，社会学的に思考された人間学においても，個人としての人間像，すなわち「主観としての自己」は維持されたままであり，それに対して，エリアスは「開かれた人間像」を定立することによって，個人と社会の対立を克服しようとするのであるとする。結局エリアスは,「開かれた個人」，すなわち「諸個人の社会」という考え方をとることによって，その「諸個人」がうみだす葛藤や編みあわせが独特の秩序を形成していることを明らかにしようとするのである。このような「開かれた人間像」とそのような人間が形成する社会との新たな関係を構築しようとする試みこそ，エリアスが主題として据えようとしていったことではないかとする。さらにこのことが「文明化の過程」として，社会のダイナミックな歴史的変動として示されるのであるとする。エリアスのこのような問いは，大勢の人間の共存は，いかにして可能かという点にあった。それは個としての生と，歴史的，社会的存在としての生を両立させるところでしかあり得ない。この点にエリアスの基本的モチーフが読みとれるのであり，そこには様々な時代的制約や社会的圧力の中を，ドイツ系ユダヤ人として生き抜いたエリアスの諦観と希望が表れているのではないかと著者は論ずるのである。

本著の概要は以上のようなものである。本著は，エリアスの本格的研究がきわめて少ない日本の研究状況において，はじめて初期研究に言及したものであり，類例をみない。また，ヨーロッパにおいても初期研究は，1990年のエリアスの死後，新たに発掘された資料や論文によってごく近年開始されたものであり，特に1922年－24年の博士論文に関して言及した論稿は未だ数本にとどまっているという状況である。このことを考えるならば，本論文はきわめて先駆的で，開拓的な研究と言いうる。本論文の特徴と評価はこの点に存在する。

以下，本論文の編成と内容を簡潔に紹介し，本論文の審査結果を記すこととしたい。

・論文の章節構成

序　章

第１章　『理念と個人』―歴史における人間の位置づけ

１．哲学における「歴史」―歴史哲学の歴史

２．新カント主義における歴史哲学の試み

３．『理念と個人－歴史の概念についての批判的研究』

４．カントの「アプリオリ」への新しい解釈

第２章　現実妥当な人間像―1920年代の人間学的転回とシオニズム青年運動

１．人間学的転回

２．エリアスと人間学

３．シオニズム青年運動

４．「ブラウ・ヴァイス」

第３章　『諸個人の社会』

1．『理念と個人』から『諸個人の社会』へ
2．「全体」と「個」，諸機能と諸関係
3．「諸個人」であり「社会」であること
終 章

・論文の各章要約

本著は，序章においてこれまでの研究状況を鳥瞰し，そこから導出される課題を示した上で，本著で取り扱う課題の限定を行っている。以下第１章から３章までは初期エリアスにおいてどのように彼の主題の形成がなされたのかを，クロニカルに叙述する中で浮き彫りにしようと試みている。第１章，第２章では1920年代から30年代のエリアスの研究や影響を与えたとされる思想状況，及びエリアスのシオニズム運動への関与について述べ，続く第３章では，これらの諸契機がエリアスが考える人間像として，1930年代の諸著作の中でどのように結実していったかを明らかにしている。終章ではそれらの叙述をまとめ，序章で述べた課題に応え，初期エリアスの思想の形成過程を総括している。本著の構成は以上のようである。以下各章を要約したい。

序章では，本著で扱う課題が述べられる。著者はエリアスの受容において，これまで多様な解釈と評価が存在したことをあげている。この原因として著者があげるのは，エリアスが学際的研究をめざし，幅広い研究領域を対象としたこと，およびエリアスの学問的背景が医学，哲学，心理学，社会学と後半にわたること，またそれらがヨーロッパの精神的伝統に深く根付いていること，さらにエリアス自身の特異な時代経験をあげている。

さらに著者が注目するのは，エリアスの研究には初期と後期との間に強調点の移行が見られるという議論が，ハーファーカンプによって指摘されていることである。このような点をふまえ，著者は「エリアスの著作を読み解く際には，個々の研究における個別のテーゼを検討するだけでは不十分であり，エリアスの学問的，経験的背景をも読みとることが必要となってくる」と主張する。

このために著者が研究対処とするのはエリアスの初期の研究である。著者は先行諸研究から，第１次世界大戦後のブレスラウ（Breslau）時代にエリアスの学問的基盤が形成されたことは一般的な認識となっているとし，この期の研究の重要性を主張する。このことから著者は，エリアスの初期の研究を対象として設定すると述べる。

本著ではエリアスの初期を，通説にならい亡命前までとするが，その中でエリアスの思想的形成過程のメルクマールとして，1922年－24年の「哲学博士論文」でなされたカント批判から，エリアスが哲学から社会学への転換を表明していく契機となったもの，及びその契機から『諸個人の社会』執筆に至るまでの人間像の形成に置き，どのように哲学的人間像とは異なる新たな人間像の形成へと結実していくのかを問い，その過程を，歴史的，思想的背景との関係をふまえ考察することに主眼を置く。このため本著では，エリアスが学問的基盤を形成したとされる1920年代のブレスラウ期から,『諸個人の社会』を著す1930年代後半までの時期に焦点をあて，エリアスの学問的，経験的背景を探り，初期の主題構成過程を浮き彫りにすることを試みることを課題とすると述べる。

第１章では1922年7月に哲学博士論文（Dissertation）として提出された「理念と個人―歴史の概念についての批判的研究（Idee und Individuum. Eine kritische Untersuchung zum Begriff der Geschichte）」を検討

する。エリアスが博士論文において取り組んだのは，直接には，当時の歴史認識であり，とりわけ新カント主義に代表される歴史認識であったとされる。それは最終的にカント批判へといきつくとされるが，この批判を通してエリアスは，後年の諸著作において展開する哲学的認識論への批判や,「フィギュレーション（Figuration）」および「ホモ・ノン・クラウスス（homo non clausus）」といった考え方を萌芽的に形成し，哲学から社会学へ移行する。従って，エリアスの社会学的な主題形成過程においてこの博士論文は重要な位置にあると考えられる。このことを検討していく眼目として著者があげるのは博士論文における歴史研究の探究とカントへの疑義はどのような観点からなされたのか，それを考察することであるとする。

このような考えから，１節，２節では，エリアスが批判していく歴史哲学のかかえる問題と新カント主義の歴史哲学の試みが鳥瞰される。

エリアスが博士論文において取り組んだのは，そこでの歴史認識をめぐる根本的な問題,「自然科学」的な「主観－客観」の図式にもとづく認識を，歴史哲学がそのまま採用するということにたいする疑念であったとする。エリアスは，博士論文の冒頭において「自然科学の方法によっては規定されえない事実があるという認識とともに，個人（Individuum）の問題がたてられている」と述べているが，このことからエリアスの問題設定において，自然科学における「普遍法則－特殊ケース」という図式を越えて，歴史研究を哲学において科学的に基礎づけることはいかにして可能か，という問題が扱われていると捉えることができるとする。さらにエリアスにおいては，新カント学派の歴史認識においては疑われなかった，自然認識の根底にある主観－客観の図式への批判への道が示されているとする。このような歴史認識の問題を前提に第３節ではエリアスの歴史認識，続く第４節ではカントのアプリオリに対するエリアスの解釈について述べられ，「諸個人の社会」につながるエリアスの歴史と人間像の転換の契機を浮き彫りにすることが試みられている。

エリアスは博士論文において，自然の法則とは違った歴史の秩序があるという認識に立ち，そのような歴史的秩序はどのようにして捉え得るかを課題としたとする。歴史的な生起は,「普遍－特殊」では捉えられないとすることから，自然科学的な方法によらないやり方を求めるのである。エリアスがそのようなドグマティックな歴史研究の方法にかわって必要とするのが,「哲学の批判的方法論」であったとする。それゆえエリアスは，カントの批判哲学を参照する。カントは，経験対象の構成的な諸条件を，対象の認識の諸条件であると説明することで，これらの諸条件の非経験的な，すなわち論理的な特質を証明した。しかし，エリアスは，カントにおいてもまた，普遍への傾向が見られるとするのである。普遍的な条件としての理念と，そのもとでの特殊なケースという関係は，歴史的な秩序における個々の生起との関係を捉えることはできないとされる。すなわち，カントが悟性の一般的法則としたものとはまた別の法則性が考えられる。ここにおいて，エリアスは,「普遍と特殊」ではない法則性，すなわち自然科学の全体的な発展と，部分的な法則の発見の関係を捉えることから，思惟も，アプリオリなものではなく受け継がれるものだと捉える。そして，そのような考えは，カントがアプリオリであるとしたカテゴリーの批判へとつながる道を示すことになる。

エリアスは，新カント学派の歴史認識の問題から出発し，カントのアプリオリなカテゴリーに疑義を呈することによって，その根底にある近代の認識論における主観－客観図式の問題へ至ると考えられる。それは，自然科学的な方法論では捉えられない対象として人間や歴史を捉えることであり，そこからエリアスは独特な歴史の秩序を捉えていくといえる。歴史の全体性と個々の生起としての個別性の関係は,「普遍と特殊」では捉えられないのであり，それらをつないでいるのは「歴史における特有な秩序」である。エ

リアスにとって，歴史研究の対象は,「回顧して把握しようとすることが無駄かもしれない諸出来事の，構造のないかたまり（a mass）ではなく，独特の秩序の枠組みによって整理され，お互いに関連づけられている，諸事実の連続（sequence）である」とされる。出来事を，個別に取り出すのでもなく，普遍法則を導き出すのでもない，その関係性においてみるとするならば，ここには，後年の「フィギュレーション」「編みあわせ」という考え方につながっていく萌芽をみることができると著者は論じる。エリアスは，博士論文において歴史研究への批判哲学の貢献を試みたのであった。そのような試みの中で，エリアスはカントの理念（Idee）の概念の検討を出発点とし，歴史的な秩序と諸生起の個々の連関を，その全体において見ていこうとすることから，最終的にカントに疑義を呈することとなったとする。

このことから，エリアスは歴史の基軸に「個人（Individuum）」という概念を置くのである。そのような人間の包括的，実体的な捉え方に，いかなる変化も被らない人間の本質としての悟性や理性を内面に保持している人間像への懐疑が見えるとする。そしてそこに，近代哲学の人間像を越えて，より歴史的，関係論的な人間像を形成する素地が見えつつあるとし，そのため，エリアスは，カントのアプリオリな概念を，思惟の歴史的連関を見ないものとして批判していくのだと著者は指摘するのである。

しかし，博士論文においては，依然として「精神」の１次元的な世界に関連した議論にとどまったままであるといえ，哲学的な表現形式であることは否めないとする。著者は，ここではまだ，歴史的現実を生きる人間を捉えようとするエリアスの試みが，萌芽的にのみ見られるといえる結論する。だが，２年半に及ぶ，ヘーニヒスヴァルトとの博士論文をめぐる激しい論争は，人格的な葛藤以上に，ヘーニヒスヴァルトを介して学んだ，アプリオリな妥当概念，認識の超越論的モデルの非歴史性と非社会性に特徴づけられる，近代ヨーロッパ哲学のより重要な基本仮定との葛藤があったと考えられる。そのため，エリアスは，自身の問題関心の追求の場を，哲学以外の場所へ移すことによって，１次元的，哲学的な人間像ではなく，より関係論的，過程的な人間像の形成を課題としていく。このことが哲学から社会学へと研究領域の変更という事態を生み出したとするのである。

第２章ではこの転換を生み出すに関連したと推測されるエリアス自身の経験と，ドイツ哲学における「人間学的転回」について述べられる。１節，２節では人間学的転回がどのような状況の下に生じ，エリアスがそれを共有したか，またそれとは異なるエリアスの志向について分析される。著者は，R. バウムガウト（Baumgart），V. アイヒェナー（Eichener）を参照し，「現実妥当な人間像」の形成を求めたエリアスには，当時の人間学的転回の刻印がみられるとする。

人間学的転回として，M. シェーラー（Scheler）にはじまるとされる哲学的人間学は，人間を他者との生ける交流において捉え直しながら，近代の主観性を批判的に超克することをめざした。哲学を支えてきた自律的な理性の主体としての自我が，個人主義からエゴイズムに変質することによって，他者の喪失という基本的な欠陥を持つに至るのであり，この他者の喪失を回復することに，近代哲学の課題を見ることができるとする。これに対しエリアスに見ることができるのは，歴史と名づけている過程のなかで変化するものは「人間相互の関係と個々の人間がその中で経験するモデル化」であるとする。そのようなモデル化は，諸社会，諸個人によって種々の違いを見せる。しかし，エリアスは,「こうした全ての違いが分かるのは，他ならぬそれらの根底に人間社会の同じ種類の法則性があるからである」とするのである。エリアスが捉えようとしていたのは，そのような意味での「人間の本質」であり,「理性」や「悟性」という永遠に変化しない「本質」が存在するのではなく，それらも含めた衝動や情感の構造を，心の全体として捉えようとする点に，人間学との接近を見ることができると著者は指摘する。

しかしまた，人間学との相似性が見られつつも，エリアスは，間主観性という人間学的試みによっても前提とされる認識論的主体という人間像ではなく,「開かれた人間」像を定立していくことにより，人間をより歴史的，社会的に捉えていこうとするのであり，そこに相違が見られると著者は指摘する。エリアスは，人間の「本質」を心的要素に還元するのではなく，あくまでも人々の歴史的，社会的な編みあわせの過程に求めようとするのであり，その点でより社会学的志向を持つとするのである。

エリアスの歴史認識とそれによって要請される新たな人間像の形成は，20世紀初頭のヨーロッパが生み出した社会変化と人間との力動的関係の意識化が契機となるとするが，同時期のエリアスのシオニズム青年運動への関与もこのことの契機となった考えられるとする。以下３節，４節で，著者は当時のシオニズム青年運動の性格とエリアスの理論形成との関連について，同時期に指導的立場にいたM. バントマン（Bandmann）の日記や，「Reflections on a life」（以下『自伝』とする）などを典拠にこのことを考察する。エリアスは全国的なシオニズム青年運動の組織の一つである「ブラウ・ヴァイス」の中の，「ブレスラウ・ブラウ・ヴァイス」に属し，指導的立場にいた。だが「ブラウ・ヴァイス」内における思想の相違は，激しい議論のやりとりや強い絆をとおして，ドイツ人とユダヤ人との葛藤や対立，妥協とともに，ユダヤ人内部の葛藤や対立をもエリアスに経験させることになったと考えられる。このようななかで「自己教化する個人」の像は，理想でもありえたが，他方でそれは人々の編みあわせのなかに投げ込まれている存在として，エリアスに捉えられていったとする。著者はハッケシュミットの指摘を受け，ここに,『文明化の過程』において明らかにされる「編みあわせの秩序」のモティーフがあると指摘する。エリアス自身が『自伝』で述べているように，このようなヨーロッパにおけるユダヤ人やマイノリティをめぐる経験は，後の「エスタブリッシュ＝アウトサイダー」関係として表される権力バランスの考察，さらに，ユダヤ人を取りまく環境や，シオニズム内部での葛藤や対立において，エリアスの「編みあわせの秩序」のモティーフに結実していったのではないかと著者は指摘する。また「松明リレー」として表現される，社会と諸個人のプロセスとしての特性，といった社会の動態的な把握が見られるとする。このような経験は，エリアスに，ダイナミックに変動する社会や歴史のなかで人間を把握していく萌芽的志向の形成を促したと著者は推測するのである。

第３章ではこれらの経緯が，エリアスにおいてどのように結実していくかを，1930年代の著作,『諸個人の社会』と『文明化の過程』おいてみていく。まず１節では，博士論文執筆時のエリアスの新しい人間像の萌芽とその限界について指摘する。エリアスは博士論文において,「個人（Individuum）」を「秩序と，この秩序に適合するものすべての代表者」であるとする。それによって，メルツ- ベンツが指摘するように，個人の概念は歴史過程の諸力（Kräfte）の表現形態として理解されうるのであり，そのような人間の包括的，実体的な捉え方に，哲学の主観―客観の図式を乗り越える萌芽を見て取ることができるとする。しかし，ここでは「個人」において「全体」が反映されることが捉えられているが，それは一方向的であり，多くの「個人」の諸関係によって，それらの「個人」自身も変化し,「全体」も変化するという思考には至っていないとする。ここで,「個人」は「個（Individuum）」として捉えられており,「個々の生起」をその諸関連において，そしてまた全体との関係において捉えるという動態的な視点がすでに見られる一方で，個々の生起それ自体から自律した（孤立した）客観的な歴史の秩序（理念）の存在が想定されており，依然として一元的，哲学的思考の段階にあるといえるとする。だがこの限界は,『文明化の過程』において，エリアスが「個人的心理学的構造」と「社会構造」との関連を，「同一の長期的発展のなかに相互に依存する個々の局面として」，関係論的に把握しうることを示し，同時に，人間を理性や悟性によって捉えるので

はなく，諸関係において変形する「情動を含めた心の全体」において捉えること，さらに「社会発生学的」に「歴史的変化の秩序，動態，具体的メカニズム」を解明していくことにより，越えられていくとするのである。しかしエリアスがこのような「社会発生」という見方をとるにあたっては,「個人」を重視する立場と「社会」を重視する理論的立場の対立を越える必要があったとする。そのためにはこの「２つの陣営」によっては解決されない「個人の意図や行為」と「社会形成物」との間のギャップと亀裂が埋められなければならない。エリアスはそのことから「諸個人が社会を形成する，もしくはそれぞれの社会は諸個人の社会である」という認識を，概念化することが必要となったとする。

２節ではこの「諸個人の社会」の概念化に関して論述される。著者はエリアスが，人間の諸関係が「編みあわせの秩序」として歴史の推進力を生じさせ，それによって諸個人の心理学的構造も変化するという視点へと移行すると指摘するが，それを可能とした人間像はエリアスにおいてどのようなものとして定立されたかを問う。エリアスは，その問いに，諸関係のなかにある「孤立してない人間」像を，全体と個の諸関連において捉えることによって答えるとする。エリアスは，ここでゲシュタルト理論の影響のもとに従来の要素主義を否定し，全体は部分の合計ではないということ,「個々の要素の精査によって解明できない特別な種類の法則を明らかにする」という考えを構築していったとする。ここで，エリアスは，個別と全体の関係において捉えるとした哲学的思考を，よりいっそう動態的で相互連関的に展開していくのであり，全体における諸生起を，全体と個別，個別と個別の，大きな相互に行き来する連関において捉えようとしていると，著者は指摘するのである。しかしエリアスは「全体（Ganzen）」を，けっして調和的で，実体的な構造を持つものとして捉えるのではなく，時間の領域において開かれているものとして，人間相互の編みあわせの力学によって変動する場全体として捉えるとするのである。

３節はこのことをまとめ，個人は「諸個人」であり「社会」であるというエリアスの人間像が示される。エリアスは，人間存在の基本的な条件を，多くの相互関連した人々の同時的な存在としてとらえ，そのような存在のあり方は，共時的な諸関連だけでなく諸個人の歴史的な継続性からも切り離すことはできないとしたとする。そして個性的存在も，個人的な形（Gestalt）を形成する個人化の全体プロセスに依拠すると認識し，諸関係のなかにある人間像，諸関係によって成長する人間像を提示しようとしたとするのである。このことからエリアスは不安や無意識の層というものも人間相互間の関係の構造との連関，社会的構造を変化させていく編みあわせの秩序との関連においてのみ理解できるものであるとする。

このような捉え方は，個々人のあり方は,「私」(＝個人）が世界の中心にいて，それをとりまく世界（＝社会）がある，という世界像を転換させることになる。終局的にエリアスは,「私」を個として孤立した人間像ではなく，はじめから諸関係のなかにある人間像，諸関係によって成長する人間像として，提示しようとするのである。このように捉えてはじめて，個々人の編みあわせが社会を形成しているとする視点が可能になったとする。著者は『文明化の過程』や『諸個人の社会』において，エリアスは，人々の情動や意図の絡み合いと，社会の歴史的な変動との関係を明らかにしながら,「開かれた個人」としての「諸個人」の営みを歴史的，社会的ダイナミクスのなかで捉えるという視点を提示していくのであり，その中心をなすのは哲学的，静態的な人間像，社会像ではなく,「社会学的」，関係論的，動態的な人間像，社会像であるということができるとする。このことが後年の「ホモ・ノン・クラウスス（「開かれた個人」）」という人間像，そして，そのような人々の編みあわせによって形成される「フィギュレーション」という社会像へと継承されていくと考えられると結論するのである。

終章では序章の設問に答え，エリアスの初期の研究における社会学的な主題の形成過程を，思想的，歴

史的背景をふまえ以下のようにまとめる。

第一に，エリアスが，哲学的人間像を非歴史的，非社会的であるとすることで哲学から離れ，より「現実妥当な人間像」の形成を求めて，理論的，経験的研究に取り組む過程に，エリアスの社会学的な主題の端緒となる新たな人間像の形成を見ることができる，とする。エリアスの哲学からの乖離は，1920年代に提出される哲学博士論文をめぐる，ヘーニヒスヴァルトとの論争を契機としている。エリアスは，哲学博士論文において，歴史研究への批判哲学の貢献を試みた。そのような試みは，当時の新カント主義と同じ意図からなされたと考えられるとする。だが，新カント主義に代表される歴史哲学が，歴史研究への自然科学的な方法の直接的な適用を批判したのにとどまったのに対して，エリアスは，最終的にカントのカテゴリー概念に疑義を呈することとなる。エリアスにとっては，人間の思考の根本原理でさえも歴史の一部であり，社会的関係の内部における「教えられた知識の財産」としての「人間の経験の宝庫」なのであったとする。このような認識が，エリアスの研究領域を，哲学から離れさせ，後には社会学へと移行させたとし，それは，後年の，近代の認識論的主体への批判につながっていったと著者は結論づける。エリアスにとって，近代的自我，主体性への確信は持ちえないものであり，独立した，個人で完結した人間を思惟の中心点として想定することは容認しえないものであったとするのである。

第二に，エリアスの哲学からの乖離は，思想史的には，1920年代のドイツ哲学における人間学的転回を背景として想定できるとする。哲学的人間学は，非歴史的，非社会的な哲学的人間像から離れ，歴史的，関係的な社会学的人間像の形成を目指していく試みをもって，哲学的反省の社会学化と平行して，ドイツ哲学において生じたのであり，そこにエリアスへの影響関係が推測されるとする。さらに，本著では，エリアスのダイナミックに社会と諸個人を捉える視点が，理論的な反省によるものだけではない点を，彼のシオニズム青年運動における活動をとおして示される。エリアスの青年期におけるシオニズム運動の経験は，エリアスの人間像，社会像の形成の一助となったとする。

第三に，上述の思想的変遷が結び合わされ，エリアスの「現実妥当な人間像」の形成の試みへと行き着くこととなったとする。エリアスの，「現実妥当な人間像」への問いは，人間発達の生成発展についての経験的理論的研究の領域において答えが可能であるとされたのであった。しかし，社会学的に思考された人間学においても，個人としての人間像，すなわち「主観としての自己」は維持されたままであり，それに対して，エリアスは「開かれた人間像」を形成することによって，個人と社会の対立を克服しようとするのであるとする。結局エリアスは,「開かれた個人」，すなわち「諸個人の社会」という考え方をとることによって，その「諸個人」がうみだす葛藤や編みあわせが独特の秩序を形成していることを明らかにしようとするのである。このような「開かれた人間像」とそのような人間が形成する社会との新たな関係を構築しようとする試みこそ，エリアスが主題として据えようとしていったことではないかとするのである。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の内容は以上の通りである。本論文の評価しうる点として以下をあげられる。

本論文は，日本においてエリアスの本格的研究がきわめて少ない点，及びヨーロッパにおいてもエリアスの初期研究が開始され，研究蓄積が少ない点を鑑みるならば，きわめて先駆的で，開拓的研究と評することができ，今後の日本のエリアス研究の一歩を記す位置にあると言える。この点にまずは本論文の評価をおくことができる。

同時に，本論文の意義は，ヨーロッパでも先行する研究が少ない，エリアスの1922－24年の博士論文を

エリアスの研究の起点として考察した点にあり，このことによりエリアスが，近代的認識主体への批判を志向させ哲学的人間像からの転換と，「ホモ・ノン・クラウスス」としての人間像の定立へと向かった必然性がそれなりに説明し得たこと，またこのことと関わり，関係的，社会的人間像への転換が一方では自己制御の過程として，他方，諸個人間の葛藤や編みあわせが独特の秩序形成をもつ「社会のダイナミックな歴史的変動」として過程的，関連的に把握しうる像へと結実していく過程が，この人間像の定立を軸に示し得た点にある。著者の言及する，エリアスが近代的自我，主体性への確信を持ち得なかったという主張は，今後の初期研究の深まりの中で再度吟味する必要があろうが，いずれにせよ，従来の研究に比しても著者独自のエリアス象を浮き彫りにし得ているという点で本論文は評価しえる。

他方，本論文にはいくつか検討を要する点も見られる。その多くの点は先行研究が少ない先駆的研究という点に起因すると思われるが，第一に著者があげているエリアスの独特の経験という点で，シオニズム青年運動がエリアスの思想形成にどのような影響を与えたか，今一つ説得力を欠いていると見える点である。近年のウェーバー研究でも研究者の経験と思想との関係をどのように論証していくかは議論となっており，確かに困難な課題とは言える。さらにエリアスの場合，資料が決定的に不足している中でやむ得ない制約を持つことは理解し得るが，同時期にシオニズム青年運動に従事していたフロムとの異同等，傍証的資料を含め，もう少し広範な資料によって補強することで説得力を増すことができたのではないかと思われる。この点は別に独立の論稿を必要とするほどの作業となろうが，今後とも資料の発掘がすすむ中で継続して深めていくことを期待したい。

第二に，本論文は初期の思想形成過程に課題を限定し，そこにおいてクロニカルな叙述方法を採っている。著者のこのような課題の限定は，認識論的切断の有無に関する議論に対する著者の「思想の連続性を自明のものとせず」という慎重な姿勢から生じていることは理解し得るが，その上でなおかつエリアスの後期の全体像に関する叙述が行われていたら，初期の主張点について，エリアスに通底するより明確な像を描き得たのではないかと考えられる。このことは本著の範囲を超える過分な要求かもしれないが，著者の今後の研究の展開への期待も込めて述べておきたい。

とはいえここで示したような点は，エリアス研究自体の蓄積の薄さにも起因しており，むしろ著者が今後の継続的研究によってエリアス研究全体を深めていく中で克服して行くべき課題と言える。

以上の評価と検討を要する諸点の指摘がなされたが，審査委員会としては，本論文が先駆的且つ開拓的研究であり，また独自のエリアス像を提示し得ていることから，一致して学位（社会学博士）請求論文として妥当な水準に達しているとの判断を行った。

今後はこの成果の土台の上にさらに研鑽を積み，日本におけるエリアス研究の展開を深めていくことを期待するものである。

【試験または学力確認の結果の要旨】

審査委員会は学位請求論文を精読し，２時間にわたる公聴会での質疑応答を行った。それらを通して本論文に示されている著者の識見が，長年にわたる著者のねばり強い研鑽，特にエリアス自身の論文を始めとするヨーロッパのエリアス研究や社会理論，社会思想史に関わる論文の広範な読了に基づくものであり，豊かな学識を有することを確認した。審査委員会は，著者がこの研鑽の中で独語原典，及び関連する英書を読みこなしており，語学力も十分であることを確認した。審査委員会はまた学位請求者が本学社会学研究科在籍中に学則に基づいて所定の単位を取得したことを確認した。

以上に基づき，審査委員会は，本学学位規定18条第１項に基づき，学位を授与することが適当であると判断するものである。

審査委員 （主査）山下 高行 立命館大学産業社会学部 教授
佐藤 春吉 立命館大学産業社会学部 教授
亀山 佳明 龍谷大学社会学部 教授